

第 12 章 青年期 I : 1953 年～1955 年前半 (16～18 歳)

白衣修道会の訓練所へ

1953-54 学年度の新学期が近づいてきた。コロン・ベシヤールの職業訓練センターの校長、白衣修道士会（訳注：1868 年アルジェにて設立される。主にカビリー地方やサハラで布教を活動を行い現在に至る。1994 年には同会の 4 人の神父がティジウズでテロリストによって殺害された。）のクロトフ（Krotoff）神父から、駐留軍の隊長のところに、私の入学を承諾するとの返事が来た。私は筆記試験を受け、コロン・ベシヤールへ、また実技試験を受け、ケナドサへ行った。幸い筆記試験に通り、その二日後に行われた器用さを見る実技試験にも合格した。その後、専攻分野分けが行われたが、私は機械工のクラスに決まった。訓練プログラムは 15 か月間続いた。私は意志を固く持ち一生懸命学んだので、生来の器用さも手伝って、理論でも実技でもいつも一番だった。校長のクロトフ神父や工房の他の先生たちも私のことを高く評価してくれた。

ここラス（L'ASSAS）職業訓練センターには、生徒たちが結成したサッカーチームがあった。私もチームに入って、左バックを務めた。チームは時には遠征試合にも出かけたが、一番遠いところではモロッコのフィグ（Figuig）まで行った。そのちょうどモロッコ遠征の最中だったが、ベトナムからあの有名なディエンビエンフーの戦い（訳注：1954 年 3 月 13 日～5 月 7 日。フランス軍とベトナム軍との間での最大の戦闘。）のニュースが飛び込んで来た。このことがきっかけで、私は軍隊に興味を持つようになり、軍の予備役の訓練に参加することにした。訓練は 1 年半に渡って展開され、その後オランとアルジェ近郊のエル・ハラーシュで認定試験が行われた。私は良い成績で合格した。予備役の合格者は、実際にフランス軍に徴収された場合には、下士官の階級で従軍する。なお、この予備役の訓練中、軍が徒競走の大会を催したことがあり、私も参加して見事二位に入賞した。一位はオラン出身のアトゥ（ATTOU）という男だった。

炭坑会社に就職するも、すぐ辞める

機械工の訓練プログラムはつつがなく終了した。クロトフ神父自らが、色々心当たりを当たってくれ、おかげで私はケナドサの炭鉱会社に仕事を見つけることが出来た。ケナドサは他ならぬ私の父が数年前から働いている町で、炭坑産業がどんな仕事かはなんとなく知っており、私はこの職場は悪くはないと思った。会社に入ると、研修期間があり、あちこちの工場や、地下の採掘場を見学してまわった。採掘場の深さは時には 700 メートルに及んだが、私は安全ヘルメットをかぶり、坑道の中を何キロも歩いた。現場では、炭坑夫たちがハンマーやコールカッターを使って石炭を切り出していた。現場は地下水が溜まって、ものすごく蒸し暑かった。たまった水はポンプで地上へくみ出されていたが、それでも熱い水滴が天井から落ちて来て首筋や背中を濡らした。掘り出された石炭の固まりはベルトコンベアで地表へ送られた。穴から出てくると、誰もが煤で顔が真っ黒になっていて、白い歯とキョロキョロ動く眼しか区別がつかないという有様だった。

この何千人もの従業員を擁する巨大企業の中であって、私はもっぱら工房で仕事をしたが、必要に応じて現場に派遣されることもあり、70 キロほど南にあるクシクス (Ksiksou) へもよく行った。毎日一つや二つの事故など日常茶飯事で、死者が出ることも珍しくなかった。石炭産業のお蔭でケナドサの町は栄えていたが、事故によって未亡人と子供たちだけになってしまった家庭も少なくなかった。ここで掘り出された石炭はアルジェリア北部やヨーロッパに送られ、自動車や船の燃料として消費されていた。コロン・ベシヤールは鉄道網の始発駅で、ここから出る自動車は東はオランやアルジェ、西はモロッコへ通じており、毎日何トンもの石炭がこの路線を通して地中海や大西洋の港へ運ばれていった。

私は父と一緒に住んでいたが、家で二人が顔を合わせるのには夜だけだった。朝起きると昼食用のサンドイッチを持って仕事へ向かった。家事は父と私とでこなした。父は、こうした状況を好ましいとは思っていなかったようだ。ある日父は私に切り出した。

「アウレフにお母さんと妹達を残して、私たちだけいつまでも、こんな遠くの町に居る訳にはいかないだろう。」

私は直ぐに父が何を言わんとしているのか察した。正直なところ、私はまだ若かったので、ここでの都会の生活が気に入っていたのだが、父の前ではそうは言えなかった。

「お前はアウレフに帰って、向こうで仕事を見つけなさい。」

父の決定に逆らうことは出来ず、私は不本意ではあったが、そうすることにした。翌日、私は辞表を出しに人事課の責任者のところへ行った。人事課で私に目を駆けてくれていたある人は、私を慰めようとして、こう言ってくれた。

「残念だよ。でも、君は信用できる男だから、きっとどこへ行っても重宝されるよ。」

イグリ～ベニ・アベスの荒野で置き去りにされたこと

二日後、私は荷物を満載したトラックの荷台に乗りコロン・ベシヤールを後にした。7月の夏の盛りに沙漠を渡るのである。この時私は奇しくも、かつての級友アーメッド・ベン・アブデルカデル・ベン・モクタール (訳注：フランス留学でも、卒業試験でも、はじさんを制して一番になった人物。) と鉢合わせした。彼は北部から夏の休暇で帰省する途中だった。羨ましいことに、彼は運転席のキャビネットに席を占めていたが、私はいつもと同じように、見ず知らずの他の乗客たちに挟まれて荷台の上だった。トラックは朝の早い時間に出発したが、山盛りの荷物のせいでトラックはのろのろと進んだ。私たち荷台の乗客は、荷台からはみ出さんばかりの荷物の間で、互いに重なり合うように身を寄せ合って苦行に耐えた。老人たちはずっと、道中の無事を神に祈り続けていたが、そうしたくなるのも全く無理のない話だった。猛暑のせいか途中何回もトラックはパンクした。その度ごとに、車体を軽くして修理をしやすくするために、私たち荷台の乗客は降りるように言われた。運転手と助手は、予備のタイヤを降ろし、車体を持ち上げ、パンクしたのを外し新しいのに取り替えた。そんなことを繰り返しているうちに、予備のタイヤは残り 2 個になってしまった。このペースで行ったら、そのうちトラックは動けなくなってしまうだろう。また、一回のタイヤ交換には 1 時間以上かかったので、貴重な時間が空しく費やされた。そのう

ち運転手は、こうした故障がまるで私たち乗客のせいでもあるかのように、当り散らし始めた。嫌な男で、喚き、汚い言葉を吐き続けた。乗客はおびえて沈黙していたが、運転手はそれを見て余計いきり立った。ひっきりなしに煙草を吸い続けては、助手の男にも、この不幸を招いたのはお前の不手際のせいだと言わんばかりに、怒鳴り散らしていた。皆疲労困憊だった。

夜の 8 時ごろ今度はエンジンが故障した。運転手は、また私たちに降りるように言い、乗客はまるで曹長の命令を聞く一兵卒のようにそれに従った。運転手は、この修理が終わるまで休憩にすると言った。この日の夜は月齢が新月にかかる頃で、トラックの助手が灯した石油ランプがあったが、夜の闇は深かった。運転手と助手は修理を始め、乗客たちは道路の脇の石の多い砂地の上で、しばしの休息のために少しでも居心地のいい場所を得ようと、方々へ散って行った。私もとても疲れていたもので、他の乗客達からあまり離れていない所で腕枕をして横になったが、すぐに猛烈な睡魔に襲われ、あっという間に深い眠りに落ちた。この間にトラックは修理を終え、エンジンが再始動する大きな音が響き渡ったはずであるが、私は目を覚まさなかった。他の乗客たちも誰か一人欠けているとは気づかなかつたらしい。翌早朝にケルザズに着いた時、運転手は一人置いてきぼりにしたことに気付いたはずであるが、結局私を探しに戻っては来なかった。大方、名家の子弟でもないらしい子供一人のために 300 キロも戻るのは割に合わないとも思っ、そのままアドラールへの道を進むことにしたのだろう。



イメージ画像：アウレフとインベルベルの間の沙漠道路。右下の轍＝道路です。

夜の沙漠を独り駆ける

一方私とは言えば、夜の 10 時ごろ目が覚めた。起き上がって左右をキョロキョロ見渡したが、私の周りには人っ子一人いなかった。まだ夢を見ているのかと思い、試しに思い切り腕をつねってみたが、その痛みは現実としか思えなかった。段々意識がはっきりして来

て、私は自問自答した。今は 7 月だ。もし、ここでぐずぐずしていたら、そのうち太陽が昇って私は干乾しになってしまう。トラックの後を追わなければ！私は夜道を駆け出した。しかし、恐慌に陥った私は、この時完全に思考を誤っていた。私が置き去りにされた地点は、イグリから 15 キロ足らずの所だったのだから、引き返せばわけはなかったのに、トラックの進行方向へ駆けだしてしまっただけだから。

私はトラックが去って行った南の方角へ向かって駆けた。道路には 10 キロおきに道標が置かれている。私が時計で測ったところ、始めのうちは 1 時間で道標 2 つ分を進んでいたが、段々疲れるに従って当初の半分のペースに落ちて行った。この日の夜は新月で、夜の闇はとて深かったが、辛うじて沙漠の中にぼんやりと白い道路が見分けられた。休憩なしに私は進み続けた。私の走る足音が辺りに木霊した。私の耳には何かを追ってくるように聞こえた。時々私は足を止めて辺りをうかがったが、何も聞こえなかった。しかし、獰猛な夜行性動物が今にも襲い掛かって来そうな気がしてならなかった。私の頭の中を様々な妄想が駆け巡った。もし肉食獣に襲われたら、骨とわずかな肉片しか残らないだろう。そうでなくても、渴き死にしたら、きっとミイラのように骨と皮だけになるに違いない。そうしたら私の遺骸の重さは 1 キロくらいだろうか。いずれにしても、沙漠で斃れたのは私だけでない。私の前にも夥しい数の人が野垂れ死にしたらろうし私が最後という訳でもあるまい…、などなど。神の加護を願ってコーランを口ずさんだが、心に平安は訪れなかった。

太陽が昇り、ベニアベスへの分かれ道がある地点まで到達した。私は実に 40 キロを踏破したのだ。道標にはベニアベスまであと 18 キロとあった。ここでしばし私は思案し、トラックが向かったケルザズではなく、最も近くの町ベニアベスへ向かおうと決めた。ヒッチハイクするにも、一台の車も通りかからなかった。私は少し休もうと思った。しかし、内なる声が「危険だ。時間が立つほど太陽は益々強くなって来るぞ。お前は水を持っていないだろう？」と囁くのが聞こえた。結局 15 分ほど休んだだけでまた立ち上がり、地平線まで一面砂しかない大地を進み始めた。休むことなく歩を進めたつもりだったが、既に力尽きる寸前で、1 時間かかって 2～3 キロ進むのがやっとだった。不思議なことに疲労の極に達した時、不思議なことに少し足に力が蘇った気がした。とにかく私は前へ進んだ。今や夜はすっかり明けていた。少なくとも夜行性の動物に喰われる心配はなくなったので、私はコーランを唱えることをやめたが、その代り今度は酷い喉の渇きに襲われた。太陽は段々高く上って行った。私は立ち止まり、手を天に差し伸べて神に祈った。

「神よ、私に今少しの力を！」

私は自分自身に向かっても言った。

「希望を無くすな！なんとしても生きてベニアベスへ辿り着くんだ。」

多分 11 時頃だと思うが、ベニアベスまであと 4～5 キロの地点に至った時、一台の車が砂煙を蹴立てて私の方へ走って来るのが見えた。私はそれを見てにわかに力を取り戻した。それは一台のジープで、速度を落とし私の横で停止した。乗っていたのは二人の男で、車の窓から私に何か英語で聞いてきた。私は、手を口の前に持って行き、水を飲むジェスチ

ヤーをし、下手な英語の発音で「ウォーター、ウォーター！」と訴えた。彼らは理解し水をくれた。一人がベニアベスの方角を指し何か言った。もうすぐそこだ、とでもで言ったのだろう。確かに既に青々としたナツメヤシの木々が見えていた。彼らがくれた水のお蔭で、少し体に力が蘇った。しかし、彼らは私に、車でベニアベスまで送ってあげようとは言ってくれなかった。また私も、内心そう欲しながら、言いだすだけの勇気がなかった。ジープが行ってしまった後、私は少し休み、また歩き始めた。またすぐに喉が渴いてきたが、前ほどはひどくなかった。

午後の 1 時ごろベニアベスにたどり着いた。一人の親切そうな男の人が、私のよれよれの姿を見て、どうしたのかと聞いてきた。私は一部始終を語った。小父さんは私を気の毒がり、自分の家へ連れて行って食べ物と飲み物をくれた。私は生き返った思いだったが、脚がパンパンにむくんで酷く痛んだ。親切な小父さんは、トラックの会社の事務所まで送って行ってあげようと言った。しかし、私は、これ以上は一步も歩けない気がして、どう返事しようか一瞬迷った。その一瞬のうちに、どうやら私は眠りに落ちてしまったようだ。どこか遠くで話し声がするので目覚めると、夕方の 5 時半くらいだった。遠くに聞こえたと思えた声は、実際にはその家の親切なおじさんが私のすぐ横で「少年よ、起きなさい」と言っていたのだった。私は、小父さんに案内されてトラック会社の事務所へ行った。

「何か用か？」と不愛想に事務員の一人が言った。

私は、昨夜イグリの南で、ここの会社のトラック置き去りにされたと説明した。

どうしてそんなことになったのかと訊くので、私は、酷く疲れていたもので、エンジンのかかる音にも目が覚めなかったのだと言った。

「なんてことだ、かわいそうに！」と、もう一人の事務員が大げさな身振りを交えて行った。

「で、どうやって、ここまでたどり着けたんだい？」

私が、自分の足で走ったり歩いたりして来たと言うと、事務員たちは更に驚いた。

「イグリからここまでだと、ラクダの隊商のように直線距離を来ても 45 キロもあるんだよ。君は道路の方を辿って来たのかい？」

私は、そうだと答えた。

「じゃあ、50 キロ以上あるよ。なんて頑丈な子だ。何かスポーツをやってるのかい？」

私は、軍隊の予備役の訓練を受けたし、ボーイ・スカウトにもいたことあると、ちょっと得意になって言った。

「なにしろ運のいい子だ。今晚はここに泊まりなさい。明日コロン・ベシャー行のトラックに乗せてあげるから、あっちでアドラール行きの便に乗り継ぐといい。」

また始めからやり直し

翌朝 6 時ごろ、私の他にも沢山の乗客を乗せトラックは出発した。灼熱の太陽の下の旅がまた始まった。トラックは 2～3 時間おきに小休止した。エンジンが過熱するのを防ぐためと、乗客も水を飲んだりサンドイッチを食べたり一息入れる必要があったからだ。トラ

ックの荷台の両脇には水のタンクがぶら下げられてあったが、乗客の何人かは自分用の水筒を携えていた。トラックの一行には、24 時間でだいたい 14 リットルが必要だったので、車に付けたタンクの水だけでは足りなかったのだ。水筒を持ってきた人たちは、それに濡れた布を巻いて気化熱で中身が冷たくなるよう工夫していた。午後の 3 時ごろコロン・ベシヤールに着いた。トラックの運転手は、そこの支店の責任者の所へ私を連れて行き、ことの次第を説明した。

「君か、一昨日置き去りにされたって言うのは？」

責任者の男は、同情の欠片もなく、そう言った。まるで、そんなアクシデントは大したことじゃないとでも言いたげだった。私は、自分という人間の価値がどの位なのかを教えられた気がした。もしこれが、誰か金持の、例えばカイドとか、どこかの名士の息子の身に起こったことだったら、電報が行き交って、役所が行方不明者の捜索隊を組織したに違いない。そのお役所仕事の責任者の男は、こう付け加えた。

「まあ、運が良かった。ここコロン・ベシヤールに誰か知り合いがいるなら、君はそこで今晚泊めてもらって、明日の朝 6 時にここへ戻って来るといい。アドラールへ行く郵便のトラックがあるから。」

私は事務所を出て父の知り合いのメリアムの家へ行き、ドアを叩いた。メリアムが出て来て、埃まみれの服を着てやつれ果てた私の姿を見ると、びっくりして言った。

「何があったの？三日前にここを出たから、もう家へ着いているとばかり思っていたのに。」私は何が起こったかを説明した。

「おお、よかったこと。神がお助け下さったのね！お父さんが聞いたら、どれだけ嘆くからしら。」メリアムは、そう言って泣いた。

メリアムが、明日は何時にトラックの発着場へ来いと言われたかと訊くので、私は 6 時だと答えた。

「じゃあ、あまり時間はないわね。まずは、よく食べて、よく休んで、また旅を続けられるように体力と気力をつけなさい。お父さんには後から知らせることにしましょう。」

彼女は大急ぎで、小麦粉と卵でとても美味しいクレープを作ってくれた。空腹の時の食事はいつだって格別なものだ。私は腹がパンパンになるまで食べた。食べ終わるとメリアムは、子供たちに煩くされないように、家の奥の方の部屋へ行って寝るように言った。夜の 8 時くらいにメリアムが起こしに来て、私はお祈りをして体を洗い、新しい服をもらって着替えた。私がそれまで着ていたものは、明日の出発までに乾くようメリアムが洗濯してくれた。その後夕食となったが、私はお腹が空いていないので要らないといった。しかしメリアムが、胃にもたれない軽いスープだから、食べる食べるとしきりに勧めるので、少し食べて、そして、また眠った。朝の 5 時頃、再びメリアムが起こしに来た。出かける時、彼女は私に小さな箱をくれた。中には、デーツ、パン、ゆで卵など、旅の間の食糧が入っていた。それに気化熱で冷やすため濡れた布で包んだ水筒も準備してくれた。おかげで前回とは違い、私は準備万端で出発することができた。